

# 想像力と倫理感

——『ロード・ジム』の一研究——

藤 原 洋 樹

岡山理科大学教養部

(1993年9月30日 受理)

## 序 論

1898年ロンドンの『ブラックウッズ・マガジン』(*Blackwood's Magazine*)から何か短編を掲載するように求められたコンラッド(Joseph Conrad)は、それまで少し書いていただけで放り出していた“Tuan Jim: A Sketch”を取り出し、書き直すことにした。その時には、その雑誌に2～3号分掲載して完結する短編のつもりであり、「青春」(‘Youth’)と「闇の奥」(‘Heart of Darkness’)と共に、一冊の短編集として出版したいと考えていたが、筆を進めていくうちに、この巡礼船のエピソードをもとにして、もう少し長いものが書けることに気づいた。そして連載は1899年10月から1900年11月にかけて13号分にまでわたり、出来上がったものが充分一冊の単行本として出版できる長さを持った『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)である。

この小説の主題は通常「罪の意識」とその「償い」にあるとされている<sup>1)</sup>が、主人公ジム(Jim)は想像力豊かな英雄志向の強い若者で、「罪の意識」よりも英雄になる絶好の機会を見逃したという「屈辱感」を強く感じている。コンラッドは、このような主人公の人間像を描き出すために、「青春」と「闇の奥」でも用いたマーロウ(Marlow)という語り手を登場させている。

この小説を読んでいて最も気になる点は、主人公のジムが自分の犯した罪に対して言い訳がましく弁解している点であり、又その弁解を聞いて語り手のマーロウがあまり反ばくすることもなく、それに同調しているような印象を与えている点である。従って本論では、これらの点の‘fundamental why’<sup>2)</sup>を論考していきたいと思うが、それにはジムが罪を犯した原因となっている「想像力」と、それとちょうど正反対の位置にある「倫理感」について考えていかなければならない。そして結論として、「罪の意識」とその「償い」という主題の裏に隠されているもの、即ち作者が本当に言いたかったことを解明してみたい。

## 本 論

序論で『ロード・ジム』の語り手はマーロウだと述べたが、正確に言うと、マーロウが何人かの聞き手を前にして語っているのは第5章から第35章までであり、最初の第1章が

ら第4章までは全知の語り手に委ねられており、最後の第36章から第45章まではマーロウの手紙によって語られている。

客観的な全知の語り手の視点から語られている第1章から第4章までは、主人公ジムのこれまでの簡単な来歴、問題のパトナ（Patna）号事件の発端とその事件の査問会の様子、そしてその後のジムの生活が述べられているが、時間的に配列した順序に従って述べられているわけではなく、査問会後のジムの生活からこの小説は書き始められている。そして時間的には144頁の第19章がその後に続くことになる。

ジムは牧師の家に生まれ、海洋冒険小説に影響されて船員になろうと決心して、「商船隊の高級船員養成のための練習船」に送られるが、この時既に彼には英雄志向の空想癖のあることが読者に知らされる。

On the lower deck in the babel of two hundred voices he would forget himself, and beforehand live in his mind the sea-life of light literature. He saw himself saving people from sinking ships, cutting away masts in a hurricane, swimming through a surf with a line; or as a lonely castaway, barefooted and half naked, walking on uncovered reefs in search of shellfish to stave off starvation. He confronted savages on tropical shores, quelled mutinies on the high seas, and in a small boat upon the ocean kept up the hearts of despairing men——always an example of devotion to duty, and as unflinching as a hero in a book.<sup>3)</sup>

しかし、或る日颱風のような強風が吹いていた時に、他の船同士の衝突事故が発生して、誰かが人命救助に向かうためにボートに乗り込まなければならない非常事態が起こると、彼の体は金縛りになったように動かなくなってしまう。

There was a fierce purpose in the gale, a furious earnestness in the screech of the wind, in the brutal tumult of earth and sky, that seemed directed at him, and made him hold his breath in awe. He stood still. It seemed to him he was whirled around.<sup>4)</sup>

彼にとって英雄になる機会を見逃してしまうのである。そして無事に人命救助を終えて戻ってきた少年が、他の少年達にその時の模様を興奮してしゃべっているのを聞いていて、ジムはくだらない自慢だと思う。

The gale had ministered to a heroism as spurious as its own pretence of terror. He felt angry with the brutal tumult of earth and sky for taking him unawares and checking unfairly a generous readiness for narrow escapes. Otherwise he was rather glad he had not gone into the cutter, since a lower achievement had served the turn. He had enlarged his knowledge more than those who had done the work. When all men flinched, then——he felt sure

——he alone would know how to deal with the spurious menace of wind and seas. He knew what to think of it. Seen dispassionately, it seemed contemptible.<sup>5)</sup>

この練習船上でのエピソードは、将来起こるパトナ号事件におけるジムの反応の伏線になっているので、注意を要する非常に重要な鍵となるものである。このエピソードから、彼の想像力には二面性のあることがわかる。英雄志向の空想癖という面と、非常事態に陥った時に現実の恐怖感を異常に高めるという面である。彼のこの二面性のある想像力は、彼がまだ自分の identity をみつけないことから生じているように思われる。現実を踏まえた自信というものが全く見られない。

彼の英雄志向の空想癖は、もちろん船員になろうと決心する前に読みふけていた海洋冒険小説の中に描かれた英雄像に影響されたものであろうが、想像力としては非常に単純で幼稚なものだと言える。彼が一等航海士としてパトナ号に乗り組んでからも、船が何事もなく穏やかに航行している時には、この空想癖にふけて高揚した気分を味わい、自分は間違いなく英雄になれるという確信を深めている。ただしパトナ号事件の後には、このジムの空想癖についての言及は見当らない。

ジムの想像力のもう一面である、非常事態に陥った時に現実の恐怖感を異常に高めることに関しては、パトナ号の前に一等航海士として乗り組んだ船の上で言及されている。

Only once in all that time he had again the glimpse of the earnestness in the anger of the sea. That truth is not so often made apparent as people might think. There are many shades in the danger of adventures and gales, and it is only now and then that there appears on the face of facts a sinister violence of intention——that indefinable something which forces it upon the mind and the heart of a man, that this complication of accidents or these elemental furies are coming at him with a purpose of malice, with a strength beyond control, with an unbridled cruelty that means to tear out of him his hope and his fear, the pain of his fatigue and his longing for rest: which means to smash, to destroy, to annihilate all he had seen, known, loved, enjoyed, or hated; all that is priceless and necessary——the sunshine, the memories, the future,——which means to sweep the whole precious world utterly away from his sight by the simple and appalling act of taking his life.<sup>6)</sup>

しかしこの記述の中で、全知の語り手が‘That truth’という言葉を使っていることからわかるように、ジムの感じ取ったこの自然の脅威は、彼の想像力が作り上げたものではなく、誰でも感じ取る真実であると全知の語り手（ひいては作者）は考えている。ただジムの人一倍強い感受性が作用していることは否定できない。この真実が、彼にパトナ号事件での自分の‘jump’はやむをえなかったものとして主張させ、マールウに向かって“what

would you have done?”という疑問を投げかけさせた根拠になっているものであり、又マーロウがジムのその主張に対してあまり反ばくすることもなく同調し、ジムは‘one of us’だと繰り返して言い、彼のとった行動に対しての道義的責任をほとんど問おうとしていない理由の一つであるように思われる。ジムの想像力のこの一面は、さらに問題のパトナ号事件において、彼の英雄になる夢を打ち砕き、彼を罪深い人生の落伍者にしてしまう。

パトナ号は錆びついた老朽船で、約800人の巡礼を乗せてある港を出港する。何日間か穏やかな航海が続いた後、ある夜この船は沈んだ難破船に衝突したような衝撃を受け、船底に穴が開いたらしく間もなく船倉に半分位海水が浸入してくる。ジムを除いて船長も含めた4人の白人の乗組員達は、とうてい沈没はまぬがれないと考え、800人の巡礼が事故に気付かず眠っているのをさいわいに、ボートに乗って離船しようとする。その際パトナ号の甲板で補助機関係りが心臓のショックで死ぬが、既にボートに乗り移っていた残りの3人は、そうとは知らずに彼にボートに飛び降りるように何回も叫ぶ。船が今にも沈もうとしているのに、800人の乗客に対してボートが7隻しかないことを考えてパニックに陥っていたジムは、ともかく船が沈没した時のために7隻のボートをつないでいた綱だけは切ったが、白人の乗組員達がボートを降ろすのを手伝わず、彼らからできるだけ離れて見ていた。しかしボートに乗り移った乗組員達の補助機関係りを呼ぶ叫び声に、ジムは思わず‘jump’してしまう。この事件の場合、ジムの想像力はジムがパトナ号が今すぐにも沈むのではないかと思った点においては、現実の恐怖感を異常に高めたと言えるかもしれない。結果的には船は沈まなかったのではあるが、ジムが思ったようにすぐ沈んでしまっていたかもしれない。その辺りが判断の難しい問題であり、一概に彼の想像力のせいにはできない。ジムは、彼と一緒にボートで逃げた3人の白人の乗組員達のでっち上げた話の真偽に関して、語り手のマーロウに述べている。

“... There was not the thickness of a sheet of paper between the right and wrong of this affair.”<sup>7)</sup>

この事件の状況が微妙であったのは確かだが、ジムが船員としての乗客に対する責任を放棄したという点で、彼が犯罪者であるということも確かなことである。パトナ号事件の査問会が開かれた時、船長は逃亡し他の2人は病院に入ってしまうが、ジムは逃亡しないでただ1人出席する。このことから考えると、彼は自分の犯した罪の償いをしているように思われるが、マーロウに語っているように、ジムには罪の意識は薄く、自分が英雄になる機会を逸したという意識のほうが強いので、彼が査問会に出席した意図ははっきりしない。ただ自分の犯した罪の責任を取ることからは逃げ出したいとは思えていたように思われる。勿論ジムの‘jump’したことに対する弁解は、作者コンラッドが祖国ポーランドを捨てて船員になり、さらにイギリスに帰化して作家となった多少後めたい気持ちを反映していると思われる。

パトナ号事件の査問会の開催中と終了後、第7章から第14章までと第16章から第17章にいたるまで、マーロウはジムと2人だけで彼のホテルで長時間話し合っている。この語り手のマーロウと主人公のジムが対峙するこれらの場面は、ジムの想像力とそれに喚起されたマーロウの想像力がからみ合っているという意味で、この小説の中で最も中心をなすものである。マーロウはジムの魂といってもよいものの告白を聞き、うんざりしながらもジムに引きつけられる。マーロウがうんざりしているのは、彼の持っている慣習的倫理感がそうさせるのであり、ジムに引きつけられるのは、マーロウの共感 (sympathy) する力も含めた想像力 (「自分には想像力はない」と彼は言っているがとても信じられない) のなせるわざである。マーロウは、ジムの人間性と若さと若さの象徴するものに魅せられて、慣習的倫理感からだんだん遠ざかっていく。マーロウのジムに対する同情的な態度から判断すると、どうもマーロウは読者を操作して、ジムを好意的に見させようとしているように思われる。「彼はジムの道義的責任についてではなく、『パトナ号』事件がジムの精神に与える影響について考えるよう求めている。マーロウはジムの行為についての判断を避けさせ、彼がだめになってしまうかどうかに関心を向けさせる<sup>8)</sup>。」ジムの告白によってマーロウの心の中にかきたてられた想像力と、マーロウの (ひいては作者コンラッドの) 倫理感を回避しようとする意図によって、ジムの道義的責任についてはまったく論議されていない。マーロウの心の中では、このパトナ号事件に関しては、慣習的倫理感というものが問題にならない位ささいな取るに足らないものになっている。

この小説にはいろいろな人物が登場して、語り手マーロウにいろいろなエピソードを語っているが、これらのエピソードは主人公ジムの人柄・行動について、又パトナ号事件についていろいろな角度から情報を提供するという役割を持たされている。

ブライアリー (Brierly) 船長の自殺は、謎めいていてショックなものであるが、結果的にはジムの道義的責任をあいまいにしている。ブライアリーは一点のしみもない完璧な経歴を持ち、最優秀船の一隻の船長をしていて、船員としてはまことに申し分のない人間である。彼はパトナ号事件の査問会の陪席の海難審判官の役目を負わされ、ジムを裁くことになったが、査問会の途中マーロウに話しかけてきて、自分がこの査問会にうんざりしていること、お金を出すからジムにどこかへ消えるように勧めてくれないかとマーロウに頼むが、マーロウは断る。その後しばらくして、ブライアリーは自分の船から海に飛び込んで自殺をする。自殺の理由は明らかにはされていないが、パトナ号事件の査問会のこと以外に考えられないことが暗示されている。ブライアリーはパトナ号事件に関して次のように述べている。

“This is a disgrace. We’ve got all kinds amongst us——some anointed scoundrels in the lot; but, hang it, we must preserve professional decency or we become no better than so many tinkers going about loose. We are trusted. Do you understand?——trusted! Frankly, I don’t care a snap for

all the pilgrims that ever came out of Asia, but a decent man would not have behaved like this to a full cargo of old rags in bales. We aren't an organized body of men, and the only thing that holds us together is just the name for that kind of decency. Such an affair destroys one's confidence. A man may go pretty near through his whole sea-life without any call to show a stiff upper lip. But when the call comes . . . Aha! . . . If I . . . ”<sup>9)</sup>

ブライアリーは「職業的品位」が大切だと言っているが、「正直なところ、アジアのあちこちからやって来た巡礼共のことなど僕にはどうでもいいんだ。」と述べているように、人間を人間とも思わない傲慢不遜なところがあり、船員としては非の打ちどころがないが、人間としてはどうかと思われる。さらにパトナ号事件から2年以上も経って、マーロウはブライアリーが船長をつとめていた船の一等航海士をしていたジョーンズ (Jones) という男に出会い、ブライアリーが自殺した時のことを彼から聞き、目の前にしている光景に対し次のような感想を洩らす。

The sight of that watery-eyed old Jones mopping his bald head with a red cotton handkerchief, the sorrowing yelp of the dog, the squalor of that fly-brown cuddy which was the only shrine of his memory, threw a veil of inexpressibly mean pathos over Brierly's remembered figure, the posthumous revenge of fate for that belief in his own splendour which had almost cheated his life of its legitimate terrors. Almost! Perhaps wholly. Who can tell what flattering view he had induced himself to take of his own suicide?<sup>10)</sup>

マーロウはブライアリーを、人間的には全く評価していないし、彼の自殺に対しても同情的ではなく、皮肉な目で眺めている。又マーロウはパトナ号事件から3年以上経って、シドニーでパトナ号を救助したフランスの砲艦に乗っていた年輩の海軍少尉に出会い、その時の話を聞かされる。彼は、砲艦が半分沈みかけているパトナ号を曳航していった時に、パトナ号に残って30時間も監視を続けた勇気ある立派な船員であるが、マーロウは彼のことも皮肉な目で見ている。

Time had passed indeed: it had overtaken him and gone ahead. It had left him hopelessly behind with a few poor gifts; the iron-grey hair, the heavy fatigue of the tanned face, two scars, a pair of tarnished shoulder-straps;<sup>11)</sup>

ブライアリーもフランス砲艦の海軍少尉も、船員としての義務を忠実に果たし、慣習的倫理感を至上のものとしており、想像力というものを全く持ち合わせていないという意味で、ジムと対称的な位置を占める男達だが、マーロウは彼らを賞讃するどころか皮肉な冷たい目で眺めている。このことから前にも述べたように、マーロウは読者に船員としては

彼らと対称的な位置にあるジムと彼の象徴しているものを、好意的な目で見させるようにうまく操作していると思わざるをえない。

パトナ号事件の査問会の後、ジムの想像力の質が変化している。彼はパトナ号事件の影に追われ、それから逃げるように各地の船具商の水上セールスマンという仕事をして生活していくのだが、この仕事には‘Ability in the abstract’<sup>12)</sup>が必要であり、この能力を実際に示さなければならないと述べられている。ジムにはこの能力があり、水上セールスマンという仕事では皆に認められ可愛がられる。この‘Ability in the abstract’は想像力であると考えてよいと思う。査問会の判決により、彼は船員の資格を剥奪され、屈辱的なものではあるが一応落伍者という identity を持たせられた結果、彼の想像力の質が変化したと思われる。結局ジムはパトゥーサン (Patusan) に行って想像力を発揮し、英雄という彼の理想とする identity を短期間ながら確立する。

## 結 論

パトナ号事件の査問会の途中に、語り手マーロウは長々と語られる主人公ジムの告白を聞かされるのであるが、ジムの窮境に同情をおぼえながらも何か人間の本質に関わるとてつもない真実を垣間見ているような気にさせられる。

It seemed to me I was being made to comprehend the Inconceivable——and I know of nothing to compare with the discomfort of such a sensation. I was made to look at the convention that lurks in all truth and on the essential sincerity of falsehood. He appealed to all sides at once——to the side turned perpetually to the light of day, and to that side of us, which like the other hemisphere of the moon, exists stealthily in perpetual darkness, with only a fearful ashy light falling at times on the edge. He swayed me. I own to it, I own up. The occasion was obscure, insignificant——what you will: a lost youngster, one in a million——but then he was one of us; an incident as completely devoid of importance as the flooding of an ant-heap, and yet the mystery of his attitude got hold of me as though he had been an individual in the forefront of his kind, as if the obscure truth involved were momentous enough to affect mankind's conception of itself . . . .<sup>13)</sup>

マーロウは、若くて人間的にも好感の持てるジムの告白に想像力を揺すぶられ、人間の本質に関する真実というものは、表面に顕示されていて目に見えるものよりも、その裏に暗示されていて、想像力によってのみ感じ取れるものの方に存在するのではないかと思うのである。

作者コンラッドは、1890年にコンゴへ行き、その時の経験をもとにして「闇の奥」という作品を書いたが、その中では帝国主義の理想とは程遠いうつろで無目的とも思われる西欧人達の行動を暗示的に描いているが、この帝国主義の理想に対するコンラッドの絶望が、

この『ロード・ジム』という小説にも暗い尾を引いているように思われる。帝国主義の理想は慣習的倫理感に通じるものであり、コンラッドの帝国主義の理想に対する絶望感は、そのまま彼の慣習的倫理感に対する絶望感につながったのではないだろうか。ステファン・ツェルニック (Stephen Zelnick) はこの小説について次のように述べている。

Far from offering fixed solutions, Lord Jim's brilliance is its sustained critique of the emptiness of conventional institutions, values, and ideals in a world grown diffuse and obscure in its purpose.<sup>14)</sup>

この意見は、『ロード・ジム』の中に暗示されている真実を見事についたものであり、この小論の出発点となっている疑問に答えるものでもある。「罪の意識」とその「償い」という主題の裏に隠されているもの、即ち作者が本当に言いたかったことは、慣習的倫理感に対する強い疑惑の念であり、又 identity を確立するために必要な想像力の枯渇に対する不安である。コンラッドのこの疑惑と不安は、小説の「形式」と「内容」に関して真摯に悩み模索した彼の作家としての叫びでもあるように思われる。慣習的倫理感は、これまでの小説における慣習というものにつながるものであり、想像力は作家としては絶対不可欠なものである。最後に『ロード・ジム』における、コンラッドの作家としての意図についての C・B・コックスの意見を引用しておきたい。

In Lord Jim, therefore, Conrad is exploring the adequacy of literary forms, indeed of language itself, and engaging in the modernist's quest for a new kind of fiction.<sup>15)</sup>

## Notes

- 1) 20世紀英米文学案内 3, コンラッド, 中野好夫編, 研究社, 1976, p. 78
- 2) Joseph Conrad, *Lord Jim*, Everyman's Library, 1964, p. 42
- 3) Ibid., p. 5
- 4) Ibid., p. 6
- 5) Ibid., p. 7
- 6) Ibid., p. 8
- 7) Ibid., p. 95
- 8) 小説をどう読み解くか, ロジャー・B・ヘンクル著, 岡野久二・小泉利久訳, 南雲堂, p. 124
- 9) Joseph Conrad, op. cit., p. 50
- 10) Ibid., p. 48
- 11) Ibid., p. 105
- 12) Ibid., p. 3
- 13) Ibid., p. 69
- 14) *Joseph Conrad : Critical Assessments*, Vol. II, Ed. by Keith Carabine, Helm Information Ltd., 1992, p. 244
- 15) C. B. Cox, *Joseph Conrad : The Modern Imagination*, J. M. Dent & Sons Ltd., 1974, p. 29



# On Imagination and Ethics

—— A Study of *Lord Jim* ——

Hiroki FUJIWARA

*Faculty of Liberal Arts and Science,*

*Okayama University of Science,*

*Ridai-cho, 1-1, Okayama 700, JAPAN*

(Received September 30, 1993)

Joseph Conrad's *Lord Jim* presents a very subtle subject concerned with imagination and ethics.

The Patna collides with something like a submerged wreck and the sea water comes into her. The white crew including Jim, hero in this novel, abandons her with 800 pilgrims on believing that she is going to sink at any moment. But she survives. It is obvious that they committed a sin, but Jim insists to Marlow, narrator, on the inevitability of his act and Marlow, in spite of himself, feels sympathy with Jim neglecting conventional ethics. I wonder why.

In this survey I want to investigate into an implicit subject behind the explicit one of sin and atonement.